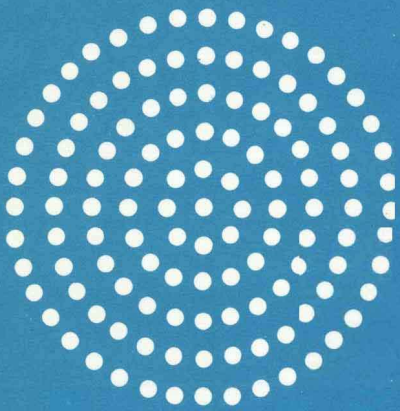
世界の詩集　18

パステルナーク詩集



稲田定雄訳

訳者　稲田定雄
1909年福岡県に生まれ、1934年大阪外国語学校ロシア語部卒業。現在日本ロシヤ文学会理事。
主要著訳書　『レールモントフ抒情詩集』（創元文庫）、詩論集『愛について』（現代社）、『プーシキン抒情詩』（平凡社）、プーシキン『サルタン王ものがたり』（角川文庫）、エレンブールク詩集『長崎の雨』（勁草書房）など

昭和四十七年八月十日　初版発行
訳者　稲田定雄（いなだ さだお）
発行者　角川源義
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
(振)東京一九五二〇八　(郵)一〇二
電話東京（六五）七二一（大代表）

世界の詩集　18
パステルナーク詩集

版　株式会社写研
印　暁美術印刷株式会社
製　三真堂印刷紙器株式会社
本　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590318-0946(0)

目

次

とりでのうえへ　七
冬の空　八
はじめてのウラル　一〇
流　氷　一三
ぼくは人生の目的を……　一四
こだま　一六
七月の雷雨　一八
雨後に　二〇
即興詩　二三
汽船にて　二五

わたしのいとしいもの——生活　二九
すすり泣く庭　三〇
鏡　三三
夜が明ける　三五
詩の定義　三七
芸術の定義　三九

主題と変奏曲　四一
変奏曲　四二
一九一八年末の大吹雪のクレムリン　四三

春　四六

第二の誕生　四七
詩人の死　四八
他者を愛することは……　五一
ぼくの美わしのひとよ……　五三
うすら明かりのほか……　五五

夜明け前の列車にて　五七
松　五八
いつわりの不安　六一
はじめての寒さ　六三
夜明け前の列車にて　六五
春ふたたび　六九
哨　所　七一
工兵の死　七三
春　七九

補　遺　八一
青天井のしたで　八三
やさしさ　八四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

穀物の取入れが　たけなわだ……　八六
何ごとでも　その核心まで……　一四四
有名になることは……　一四七

ユーリー・ジヴァーゴ詩集　八九

イ　ヴ　一四九
無　題　一五一
森のなかの春　一五三
七　月　一五五
茸がりに　一五七
静かさ　一五九
干草の山　一六一
菩提樹の並木道　一六三
気の晴れるとき　一六六
穀　物　一六八
秋の森　一七〇
朝　寒　一七二
夜の風　一七四
黄金の秋　一七六
悪天候　一七九
夜　一八一
道　一八四
病院にて　一八六
音　楽　一九〇
休止のあと　一九三
初　雪　一九五
雪がふる　一九七

三　月　九〇
白　夜　九二
春の出水の道　九六
言いわけ　九九
都会の夏　一〇二
風　一〇四
ホッフ　一〇五
小春日和　一〇六
婚　礼　一〇八
秋　一一三
おとぎばなし　一一五
八　月　一一三
冬の夜　一一六
別　離　一一九
あいびき　一二二
夜明け　一二六
大　地　一二九

気の晴れるとき　一四二

雪の上の跡　二〇〇
吹雪のあと　二〇二
曲がり角のかなた　二〇四
すべてが実現された　二〇七
耕　地　二〇九
小旅行　二一一
わたしの幼いときの女たち　二一四
冬休み　二一六
雷雨のあと　二一九
夕べのかげは　髪の毛よりも……　二二一
二度とない日々　二二三
解　説　二二五
年　譜　二五一

パステルナーク詩集

とりでのうえへ

（一九一四―一六年）

冬の空

この一週間を懸かっている天の川が
大きな氷塊のように　雲のなかから出ていた
スケーターのクラブは　引っくり返っていた
スケート場は　響たかき夜と杯をふれあうのだ

スケーターよ　滑走では　気位たかく踏み出し
できるだけ間をあけて　あけて　あけて進め
回転のとき　スケートのきしみが　星座のように
ノルウェーの空に　深く刻まれるだろう

大気は　鉄で夜にしばりつけられている
おお　スケーターよ　あそこでは　同じことだ
地上の夜が　眼鏡蛇の眼窩のようであり
ドミノの象牙の牌のようでも　同じことだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月が　ぼうっとなった猟犬の舌(した)のように
かすがいに凍りついていることも　贋金(にせがね)づくりの
口のようなもろもろの口が　とらえた氷の匂いを
溶岩のように注ぎこまれるのも　同じことだ

はじめてのウラル

産婆もいず　やみのなかで　失神して　両手で
夜にぶつかりながら　ウラルのとりでは
大声でさけびたて　死んだように落ちながら
苦痛でくらくらしながら　朝を生もうとしていた

何かの大山塊の　巨大な青銅のようなものが
ふいに　怒ったように轟きながら　顚倒(てんとう)していた
客車があえいでいた　どこかで　このために
とど松の木の亡霊が　どたりと倒れ落ちていた

くすぶった夜明けは　眠そうだった　ほかでもない
夜明けは　それら　工場や山々にたいして
手なれた泥棒が　同行者に嗅がす阿片のように
森から　竜の舌の炎を　かっかと吐いていたのだ

みんなは　火のなかで日がさめた　真紅の地平線から
そりに乗って　アジア人たちが森へくだってきた
山麓にくちづけ　松の木々に　もろもろの王冠を
あたえ　戴冠して　帝位につくように呼びかけていた

松の木々はたちあがって　毛むくじゃらな王朝の
教会政治を護持しながら　雪どけ後ふたたび凍った
オレンジ色の　ビロードのような氷におおわれて
どんすと金箔からなるベールを　まとったのだった

流氷

まだ　若々しい芽生えのことなど
春の土壌は　空想することもできずにいる
雪のなかから　その喉ぼとけを突き出して
土壌は　川岸のところで　黒くなっている

夕焼けは　だにのように　入江に吸いついた
そして　おまえはこの沼沢地から　肉とともに
夕ぐれを奪い取るだけだ　無気味な北方では
空間のひろがりは　なんという好色なことか

空間は太陽を飲みこもうとして　喉がつまり
こけのうえを伝って　この重荷を引きずってゆく
空間はこの重荷を　結氷にむかってどたりと投げ
まるで　ばら色の鮭のように　引き裂くのだ

奪い取られたような静かさの崖(がけ)が　そそりたち
なにかに酔ったような薄暮のゆらめきがある
けれど　ナイフのように　氷塊のむれは露出して
そのたたきあう音は　青白いやいばをおもわせる

黙ることなく　貪欲(どんよく)な　さびしげなしゃがれ声
悲しげにぶつかる金属音と　切るようにたたく音
そして　衝突しあう氷塊のむれの
歯ぎしりして　がりがりとかみ砕く音

＊　＊　＊

ぼくは人生の目的を理解したし　その目的を
目的としてとうとぶ　そして　この目的は
四月があるということを　我慢するなんて
ぼくには堪えがたいということを　みとめることだ

日々は　鍛冶屋のふいごだということだ
果てしもなく　終わりもない　あけぼのの
しゅう　しゅうと　吸いつくような流れが
鍛冶屋の指のあいだへはいってゆく石炭のように

もみの木から　もみの木へと　はんのきから
はんのきへと　鉄のような　曲がりくねった
液状のものとして　道という道の雪のなかへ
縞をなして　流れ出たということだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com